
消失ごっこ

吉川奈々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失ごっこ

【Nコード】

N3046P

【作者名】

吉川奈々

【あらすじ】

「ちよつと待てよ、おまえ、さつきからなに……そもそも、おまえはだれなんだ。あと、佐久間って、だれ」

この言葉が、たとえ一ミリグラムでも悪戯心を孕んでいたのなら、冗談で済んだのに。

* 記憶喪失になった佐久間と、東奔西走する帝國面子のお話

第一話@喪失

佐久間が教室に来なかった。授業を受けるのがだるいのかな、さぼるのかな、と同じクラスである源田はぼんやりとそんなことを考えて一日中、主のいない席を眺めていた。休み明けの月曜日、教室で騒ぐ面々の顔には、それでも疲労の色が目立っている。今日とて例外ではない。源田はふわあと大きな欠伸を一つ漏らすと、まあ部活にはくるだろう、と決め込んだ。なんだかんだで練習熱心な彼は、滅多に休まないのだ。たとえ体調を崩していたとして、それを隠してサッカーに興じる。そして人工芝にぶっ倒れるのだ。実際よくあることだった。

しかし源田の予想は見事、外れることになった。まさか何も言わずに佐久間が部活を休むことはないだろう、遅れてくるんじゃないか、と彼をのぞく部員は口々に言い合う。帝國サッカー部の攻撃の要がいなければ、当然、調子は狂うもので試合形式の練習はいつもの半分の力も出せていない。そもそも彼らは、佐久間のことが心配なのかなんなのか、著しく集中力を欠いていた。寺門が頭を抱える。「様子を見に行ったほうがいいのかもな……このままじゃ練習にならない。それに、ほんとうに倒れでもしていたら、大変だ」

サッカー部専用フィールドから寮棟までは結構な距離がある。というのも寮棟が学園外にあるからで、ユニフォーム姿でアスファルトに行く寺門は肌寒さを感じていた。身体を動かしていれば気にならない晩秋の気温に、今の彼の身体は敏感だった。ユニフォームは半袖だから尚更。ジャージを羽織ってくればよかったと今更ながらに後悔して、やっとのことで寮につく。やっと、と言っても実のところ、五分とちょっとしか経っていないのだが。一人でいると時間は遅く流れるものだ。

学園同様、広大な敷地を誇る寮棟の二階、最も東に位置する一角

が佐久間の部屋だ。名門帝國学園は日本中から生徒が集うので、学園から最も近いこの寮の部屋を借りるのは結構難しい、と聞いた覚えがある。それでも佐久間が易々と東部屋を手に入れたのは、サッカー部員であるからに他ならない。王者であるサッカー部はそれなりに優遇されていて、それがまさに佐久間の部屋位置に表れている。割り当てられる部費も、どこの部活動より多い。つくづく弱肉強食な校風だと、寺門は思う。思いながら扉をノックすれば、ややもせず控えめな返事が聞こえた。

「佐久間、おまえ、どうかしたのか？ずいぶん元気がないようだが。もしどこか悪くて休むならメールでもなんでも」
「あの、ちよつといいか」

と、寺門の言葉を遮って、扉の向こうの佐久間は話し始める。廊下に設えられた窓から臨む空は、たしかに冬の気配を宿し、厚い雲で覆い隠されていた。冬に入る一歩手前の今日は、ひどく冷え込んだ。それでも明日なんか、もっと寒くなるというから驚きだ。お天気キャスターの言葉が嘘であればいいのと思う。佐久間の話の続きを、廊下で寺門が一人、待っていたときのことだ。

ぽかんと口を開いたまま閉じないのは、部員も佐久間も同じだった。辺見はその間抜けな表情で数秒固まったのち、上からぎこちない笑顔を貼り付けると、呟いた。
「嘘だろ」

だれも肯定しなければ、否定もしない。だが、フィールドに立ち込めた空気はとて、辺見の言葉を認めてくれそうになかった。つまり嘘ではない、これはなんらかのたちの悪い冗談ではないのだ。もっとも部員は寺門がそんな冗談を言う性格でないとわかっていて、なにより当の本人である佐久間がいつものように快活に笑ってみせたり、にじみ出る不機嫌さを隠しもせず舌打ちしたりしないものだから、同じように嘘だと思いたくても、思えない状態に陥って

いた。佐久間をまとう雰囲気がたまにちらりと透けて、事実だと無情にも告げている。

全員が呆然と、夢の中をたゆたっているかのような感覚を味わっていた。最初に現実に戻ったのは、源田だった。彼はしばらく佐久間を凝視していたが、やがて目を逸らし俯くと、はつきりと言った。
「すまん、俺、もう帰るわ。じゃ」

やけにあっさりとした、普通の声色で、さもすればこんな事態だと忘れてしまったかもしれない。成神が慌てて、すたすたと歩き出した源田を呼び止める。

「先輩、ちよつと待ってくださいよ！いいんですか、佐久間先輩がこのままで……！」

「よくないに決まってるだろ」

「じゃ、じゃあ！」

「でも俺にはどうすることもできないし。とりあえず医者に電話しとくからさ、あとは任せた」

源田は出口に向かいつつ、右手を軽く上げた。源田先輩つ、となおも叫ぼうとする彼を止めたのは五条だ。ひどく落ち着いた口調で、諭すように言う。

「感傷的になっちゃ駄目です。少なくとも今回の件でいちばん傷ついているのは、間違いなく彼でしょう」

「なあ、さっきから源田源田って……帰ったアイツが源田なのか？」

佐久間の虹彩には、戸惑いの色がありありと浮かんで揺らいでいた。その、通常ならありえない言葉に、部員はたじろく。いきなり記憶喪失だなんて、ほんとうについていけない。心の準備をさせてくれる時間もなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046p/>

消失ごっこ

2010年12月4日17時27分発行